

地域差の社会心理学的研究 (1)

——上五島と大阪在住者の自己像の比較——

藤 本 忠 明

The Analysis of Social Psychological Differences among Communities (1)

——A Comparison of Self-Concept between Osakaites and Kami-Gotoites——

Tadaaki Fujimoto

I. 問 題 提 起

心理学における地域研究は最近比較的数多く行なわれるようになった。1964年から1971年の過去8年間の日本心理学会大会論文集から地域研究を拾い上げると(1), 1964年に10論文, 1965年に7論文, 以後, 10, 14, 9, 8, 9, 7と毎年約10件の発表が行なわれてきた。(但し, 同一テーマによる複数の発表は1件とみなした)これら74発表を大別すると, 東京工業大学 宮城音弥グループの県民性の研究9件(日本人の性格特性, 愛知県, 対馬など), および鹿児島県の県民性研究として篠原優, 脇勝嘉の3件がある(鹿児島県, 屋久島, 種子島, 奄美大島)。辺地の研究としては下北半島を中心にしての東北大学 安倍淳吉グループの研究が12件あり, 同一テーマによる複数発表をそれぞれ1件とみなすと実に40発表にもものぼっている。この東北大学の研究以外に辺地, 僻地を取り上げた研究には甲斐直義(熊本県内の五木など), 田中国夫(兵庫県美方郡)の研究がある。さらに, 離島については, 山松質文他(対馬), 南条正明(対馬・嵯峨の島), 小滝信夫, 野村昭(隠岐), 林重政他(豊島), 淵上孝他(屋久島)らの研究がある。

沖縄については棚原健次, 文沢義永らの研究がある。

次に, 現代社会特有の過疎化あるいは過密化, 都市化に伴う社会心理学的問題, すなわち, 地域社会の変動に伴う諸問題を扱ったものとして, 南博他の都市生活者の消費意識, 星野命の都市化に伴う近郊農村の形態の変化と住民の社会的態度の変容, 大場千秋他の農村社会における文化の変容と適応のパターンについて, 甲斐直義の天草架橋による社会経済的変動地区の心理学的研究, 島田一夫他の農業団地化に伴う態度変容などがみられる。

その他, 養育行動の地域差, 日本のしつけの研究, 地域的行政効果の社会心理学的研究, 地域文化と中学生の生活, 都市生活指標の研究, 地域住民の投票行動, 地域住民の生活意識, 地域社会の非行, 精神衛生などの研究がある。

このように, 地域社会に対する心理学的研究はおおむね次の5つに分類される。

- ① 県民性の研究
- ② 辺地・僻地住民の研究
- ③ 離島民の研究
- ④ 過疎化・過密化・都市化などの地域社会の変動に伴う地域住民の諸問題

⑤ 地域社会と非行・犯罪・精神衛生・教育の問題

著者が関心を持ち、研究を始めた地域差の問題は特に①から④のアプローチを通してえられた地域社会と地域住民のダイナミックな関係系を体系づけることにある。

勿論、この体系化にはいわゆる社会心理学的方法論にもとづく地域社会への接近だけでは不十分であることはいうまでもない。地域社会および地域住民はダイナミックな社会的、歴史的、文化的、経済的關係系としてはじめて地域社会、地域住民たりうるからである。したがって、社会心理学のアプローチはいうまでもなく、社会学的アプローチ、歴史学的、文化人類学的、民俗学的、言語学的、生態地理学的アプローチ、あるいは、政治、経済学的アプローチ、衛生学的、社会病理学的アプローチ、都市工学的アプローチ等の社会科学的、自然科学的アプローチを駆使しなければならない。

これらの専門領域別アプローチはそれぞれおのずと異なった内容主体を持って地域社会に接近し、各々学問的に興味深い事実を提示してきた。社会心理学における地域研究の歴史は浅いが、将来はおのおののアプローチからえられた事実をダイナミックに分析して、地域社会・地域住民にフィードバックするような総合科学としての地域学（Science of Community）に統合される必要が感ぜられる。

本稿で論ずる「地域差の社会心理学的研究（1）—上五島と大阪在住者の自己像の比較—」においては、自己像は社会的所産であるとの考えのもとに、①都会と地方のそれぞれの人々に特有な性格特性（自己像）を見い出すこと、すなわち、都会人に新しい性格類型としての自己PR的、商品的要素の高いこと、逆に、地方人には古い型の性格特性が残存すること、②若い世代ほど地域差が少なくなっていくこと、すなわち、地域性格はその地方特有の性格ではあるが、それは社会への適応過程により獲得するものであろう、③今日のマスコミの著しい発達には地域差を少なくしているであろう、ことを目的として、上五島民と大阪在住者の自己概念像の比較分析を行なった。

II. 方 法

1. 調査用紙の作成：調査用紙は以下の6質問がもちこまれた、追手門学院大学社会心理学研究室作成の「県民性についての社会調査」を使用した。

1—1 支配—従属の関係—Arkoff, A. (2) が Dominance-Deference Pattern の交差文化的比較に用いた Murray, H. A. 改訂の質問用紙を翻訳したものを使用した。翻訳された日本語は多林大作訳 (3) から引用したものである。

1—2 人生観—人生観についての質問は8項目からなり、積極的個人主義、消極的現実主義、積極的現実主義、道徳的理想主義とに分類される。

1—3 社会的態度—保守主義、個人主義の2因子に分類される10項目を用いた。

1—4 自己像—伊吹山太郎 (4) が「近畿圏内の新規学卒労働者の職業についての希望」で用いた項目から、顕著な反応を示すと考えられる20項目を選び、各項目を5段階評定させた。ここで用いた自己像評定は、通常臨床心理学において用いられる情緒面における自己認識ではなく、主として、行動のタイプとしての自己像評価である。

1—5 地方イメージSD法を用いて（20の形容詞対を使用），五島と大阪の地域イメージをとらえるためのものである。

1—6 就職希望地—就職希望地と希望地を選定した理由をとらえるためのもので，上五島の高校生の上に解答させた。

2. 調査対象者：調査対象者は長崎県南松浦郡，県立上五島高校1年～3年の男女計549名及びその父兄男女（30代～50代）276名と大阪府，府立2高校（寝屋川市・堺市），私立1高校（茨木市）の1年～3年の男女計567名及び後者の私立高校を中心とした高校生を持つ父兄計137名で，その構成は表1に示した。

表1 調査対象者の構成

地 域 学 年 代 男 女 分 類			五 島						大 阪					
			N (名)	平均 年 令(才)	出 身 地			平均 均 在 住 数	N (名)	平均 年 令(才)	出 身 地			平均 均 在 住 数
					五島	九州	その他				大阪府	近畿	その他	
高 校 生	Ⅰ	M	73	15	73	0	0	15	133	15	128	5	0	14.4
		F	93		90	2	1		57		53	1	3	14.5
	Ⅱ	M	99	16	99	0	0	16	78	16	52	14	12	12.9
		F	108		101	6	1		76		64	6	6	13.1
	Ⅲ	M	86	17	85	1	0	17	98	17	82	4	12	14.2
		F	90		87	1	2		125		107	6	12	15.4
父 兄	30	F	27	36.7	25	2	0	34	11	37.5	5	3	3	23.3
		40	M	68	45.0	65	3	0	45	41	45.9	24	8	9
	F		97	44.2	86	8	1	44	42	43.9	23	13	6	29.9
	50	M	47	53.7	47	0	0	54	28	54.5	15	5	8	40.2
		F	37	54.1	33	3	1	54	16	52.8	4	2	10	30.2

2—1 調査対象地域およびサンプル特性

五島列島は日本の西端にある島々で，福江市ほか南松浦，北松浦，西彼杵の3郡13町から成り，上五島高校のある上五島町は南松浦郡（中通島）にある。中通島の中心地有川町は佐世保から船にて3時間程度のところにあり，毎日運航されているので離島の感はない。五島民のほとんどは農業および漁業に従事しており，中でも漁業は明治の初期までの捕鯨のなごりとして遠洋漁業，特に南氷洋の捕鯨に従事する人も少なくない。それは海に生きた人々の伝統的な性格と島の土地が狭小なためでもあろう。今日，案外気がつかないが，大陸に近い，日本の西端といった地理的条件は近世まではいわば西の玄関口であった。古くは遣唐使の寄港地として，明との貿易や南蛮貿易の船の中継地として，近代捕鯨の根拠地として，今日五島が置かれている文化的立場以上に文化的であった。また，かくれキリシタンの里としても有名で，日本中央部以上に高度な文化と接する機会を持っていたことが忍ばれる。島民の信仰心は篤く，キリスト教があれ程の幕府の迫害を受けながらも今日まで残っていたり，キリスト教に限らず，社寺仏閣の類が多いことからもうかがえる。それは多分海で働く人々の安全を願う祈りからくるように思われる。

地域差の社会心理学的研究 (1)

五島と大阪の関係は案外深く、江戸時代から明治初期までは大阪の泉南地方の漁民を中心として、魚や鯨を追って五島まで来て永住したものも少なくはないといわれている。また、今日、五島の青年の就職先のほとんどが京阪神である。たとえば、上五島高校の今回の調査における就職希望地のうち京阪神が約40%と高率である。

上五島高校の場合でも漁業従事者が多く(図1)、特に父親が遠洋漁業に出かけ不在の者が半数近くおり、教育はほとんど母親にまかされているが、無関心な者が多いという。性格としては、大阪にみられるような母子家庭的なものではなく、地域ぐるみで子供が育ってゆくよう

上五島	農 業	水 産 業	自家商業	工業	教職員	公務員	会社員	その他		
大阪	自家商店 商 社	経営者	商店 商社 店員	運輸	工業経営者 自家工業者	工業 事務	技術者	建設業	医師 薬剤師	その他

図1 五島と大阪の職業分類 五島は上五島高校昭和44年度便覧 父兄 944名
大阪は退手門学院昭和45年度便覧 父兄 2711名

表2 五島と大阪における社会的地域差要件

	長 崎 県	大 阪 府	資 料
(1)気 候 区 分	九 州 型	瀬 戸 内 型	
(2)職 業	農林水 (35.2) 鉱 工 (21.5) 商その他 (43.3)	(3.0) (47.2) (49.8)	S.40 国勢調査
(3)面 積 と 人 口	4,089 km ² 1641 (1000人)	1,840 km ² 6657 (1000人)	S.40 国勢調査
(4)人 口 密 度	401人/km ²	3618人/km ²	S.40 国勢調査
(5)人 口 移 動	6.8%減	20.9%増	S.40 国勢調査 35年との比率
(6)県 民 性	誠実、情に厚い、打算無視、思慮深い、地味、親切、正直、堅実、怠ける	反抗的、不規則、礼儀正しくない、繊細でない、積極的、向うみず、打算的、楽観的	宮城音弥 「日本人の性格」 S.44
	五 島	大 阪	
(7)職 業 と 構 成	半農半漁で機能的には等質的	商工業中心で分化が複雑	図1参照
(8)環 境	西海国立公園に指定、自然的	府内における自然観光地はほとんどなし、人工的	
(9)集 落 の 規 模	狭少で人口が少ない	ほとんど一つの地域としてとらえられる程大	
(10)人 口 移 動 (希望就職地)	地域内では固定的、都市への進出大	流動的	
(11)住民の社会関係	(1)99%までが五島人 (2)血縁、同じ土地を対象とした労働(漁業、農業)etcにより深く結びつき、相互扶助の気風が強い (3)伝統、因襲にとらわれやすい	(1)異郷出身者が高率 (2)職業、身分による結びつきが主で全人間的な結びつきはまれで利益社会的結合 (3)清新活発な空気	
総 括	地 方 的	都 会 的	

あるためらしく、明るく素直であるという。また、家庭内の職業的な性格からくる無計画性や素直さの裏がえしとして、政治的関心が低く、自己主張が苦手であるという。（上五島高校教師のみた高校生観）

このほか、今回の調査対象として特記すべきは大阪父兄の職業である。父兄のサンプルを私立高校（茨木市）に頼ったことから、全体的に、収入及び社会的地位の高い者が多く、一応社会的に成功している者ばかりであることに注意したい。

なお、都会と地方としての大阪と五島を社会学者 Sorokin, P. A. と Zimmerman, C. C. (5) の都市の概念を参考に比較すると表 2 のようになる。

3. 調査実施期日：1970年4月～7月

4. 調査実施者：藤本忠明・中村隆・荒砂正名・中島洋二・村田京子（追手門学院大学）

5. 調査実施法：各高校を中心に学生に2部ずつ調査用紙を配布し、2～3日後に回収する方法をとった。（1部は本人用、もう1部は父兄用である）

III. 結果と考察

本稿においては、5調査項目中、まず自己像の結果について論ずることとする。

自己像の結果の分析にあたり、尺度の左側に価値的に高いと思われる項目がくるように並べかえ、左から右へと1～5点の得点を与え、得点の低いものほど価値的に高くなるようにした。（なお、項目16, 17については並べかえに若干の問題がある）

次に各項目についての平均点を高校生は学年、父兄は年代ごとに計算し、両世代の地域内F検定を行なったところ、有意差が認められなかったので、学年及び年代差は無視してそれぞれ一群として取り扱った。したがって分析グループは大阪高校男性・女性・大阪父兄男性・女性、上五島高校男性・女性、上五島父兄男性・女性の8群である。これら8群について各項目ごとの平均点を示したのが表3であり、表の下段には8グループ間の総平均値によるt値を示した。この結果、尺度総平均値にもとづくグループ間の比較では、大阪父兄男性のみが他の7グループと有意な差異を示した。なお、それらをプロフィール化したものが図2、図3である。

次に、表3の中から自己評価の高いものから5項目、消極的反応を示したものを低い方から5項目ひろい出したものが表4である。表中のブランクは項目平均値が中点以下の消極的反応が示されていないためである。

地域、年齢、性別に関係なくあげられた項目は④、⑧、⑪、⑫で、すなわち親切できれい好きで、活気があり、行動的である。これは宮城音弥(6)の県民性の研究による、大阪・長崎(五島)の両地域の人々の気質が躁うつ質であるとの見解とも合致すると共に、日本の台風の性格としての活動的なエネルギーの一面がうかがえる。

また、父兄全般にみられる②注意深さは大人として当然の要素であろうし、高校生全般の⑬気分不安定性、⑭あわてやすさは精神的にまだ充分発達していないことを裏付けている。さらに、⑭文章が仲々できない、⑩口下手であるなどの項目は、高校生年齢においては、案外自己をうまく表現できない事を示すとともに、そういったジレンマが言動の不安定性、情緒不安定性につながっているとも考えられる。高校男性の持つ特性の①手先が器用である、高校女性

地域差の社会心理学的研究 (1)

表3 8 グループの尺度平均値と大値

項目	大 阪				五 島				
	高校男	高校女	父兄男	父兄女	高校男	高校女	父兄男	父兄女	
1	2.49	2.71	2.51	2.58	2.63	2.86	2.51	2.77	
2	2.72	2.88	2.22	2.58	2.56	2.70	2.29	2.57	
3	2.76	2.97	2.47	2.80	2.80	2.95	2.75	2.82	
4	2.22	2.35	2.06	2.00	2.48	2.56	2.25	2.29	
5	2.59	2.63	2.25	2.48	2.89	2.89	2.55	2.60	
6	2.92	3.09	2.50	3.14	2.93	3.05	2.91	3.04	
7	2.94	3.09	2.51	3.09	3.02	3.20	2.93	3.07	
8	2.36	2.14	2.07	2.23	2.27	2.16	2.26	2.20	
9	2.63	2.86	2.29	2.59	2.67	2.92	2.56	2.74	
10	3.21	3.10	2.49	3.25	3.18	3.26	2.99	3.16	
11	2.49	2.25	2.28	2.55	2.59	2.60	2.51	2.70	
12	2.60	2.62	2.53	2.91	2.79	2.80	2.75	3.04	
13	2.87	2.74	2.60	2.97	3.17	3.18	2.99	3.19	
14	3.39	2.98	2.87	3.26	3.62	3.26	3.29	3.42	
15	2.64	2.49	2.69	2.64	2.73	2.69	3.05	2.95	
16	3.30	3.38	2.99	3.03	3.31	3.45	3.10	3.16	
17	3.27	3.32	3.32	3.29	3.38	3.40	3.31	3.39	
18	2.86	3.08	2.54	2.84	2.97	3.15	2.90	3.04	
19	3.24	3.47	2.63	3.07	3.20	3.58	2.74	3.09	
20	2.82	2.81	2.54	2.67	2.92	2.81	2.63	2.73	
M	2.82	2.85	2.52	2.80	2.91	2.97	2.76	2.90	
地域内 F 検定		*** 8.503				1.545			
総平均値による t 値	五 島	父 兄 女	— .104	.460***	—3.810	— .952	.067	.704	—1.350
		男	.512	.782***	—2.460	— .343	1.375*	1.998	
		高校 女	—1.495	—1.105	*** 4.440	1.588	— .618		
		男	— .852	.500	*** 3.645	.986			
	大 阪	父 兄 女	.162	.747***	—2.676		*** 1%		
		男	*** 2.997	*** 3.129			** 5%		
		高校 女	— .291				* 10%		
		男							

の特性である⑮美的センスに富むは、それぞれ、男性の技術的能力の養成や、女性の服装を中心とした美への関心の高まる時期であることのあらわれであろう。

次に、地域差について各グループ間の項目別有意差検定を行なった結果を表5に示した。

年代・性差を問わず両地域に有意なる差異が認められたのは、⑬社交的である、⑭文章がすぐできる、の2項目である。⑭については両地域とも消極的な解答方向を示したものである

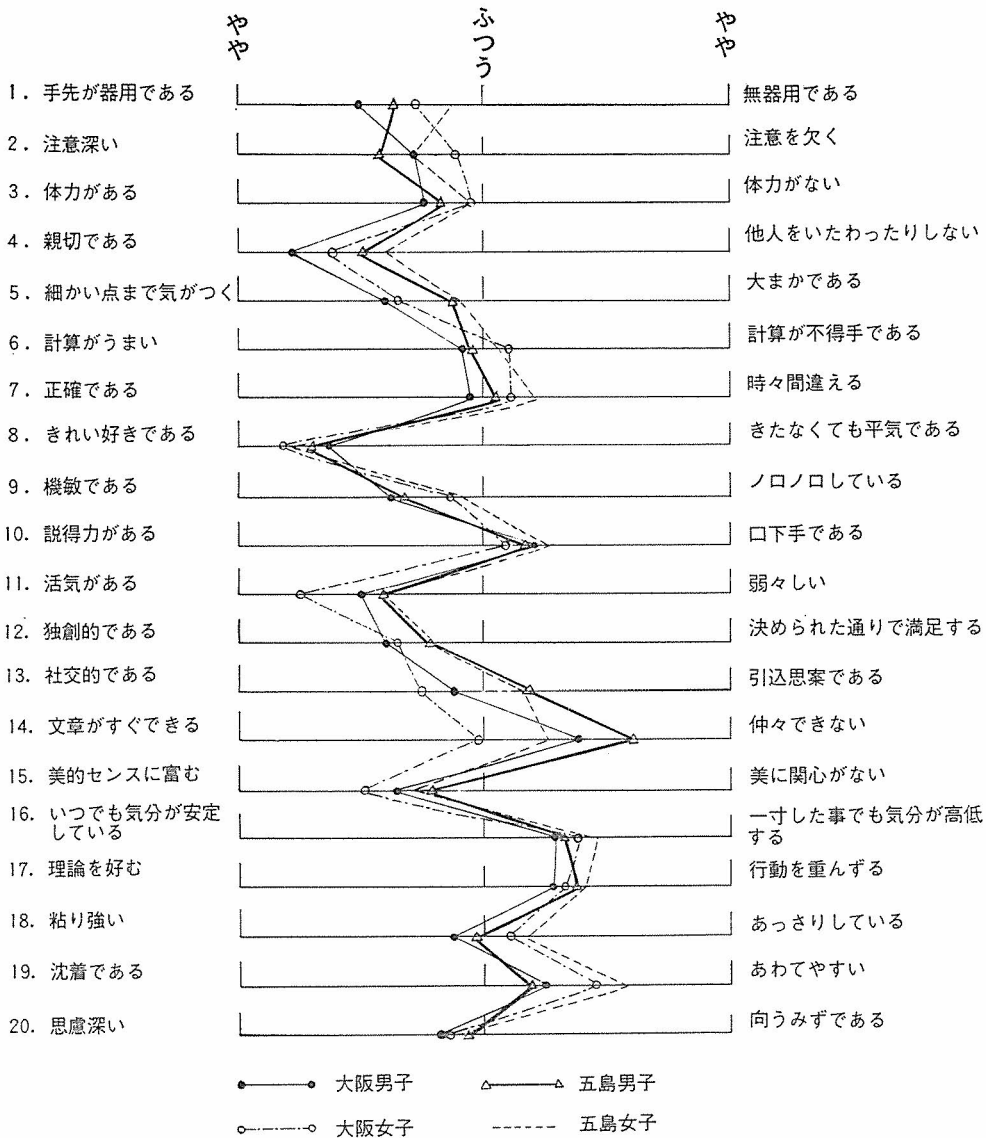


図2 高校生における自己概念のプロフィール

が、大阪の方がまだ高く評価されている。これら2項目からみるに、大阪の方が上五島以上に、自己を表現する能力を備えているといえる。

次いで、高校生についてみると、④親切である、の項目に大阪が高くなっているが、著者が

地域差の社会心理学的研究 (1)

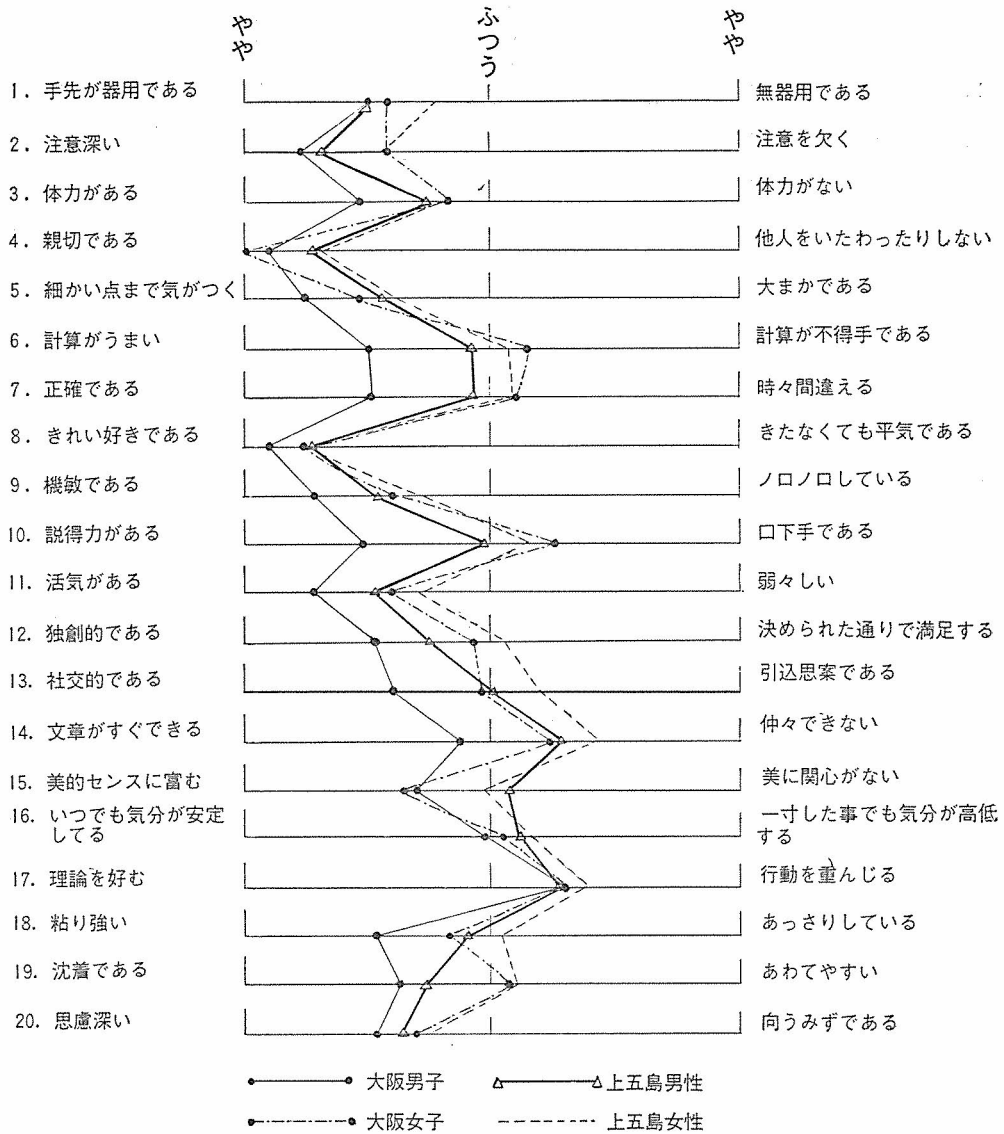


図3 父兄における自己概念のプロフィール

表4 評価の高い項目, 低い項目

評価順位	高 校 生				父 兄			
	男 子		女 子		男 子		女 子	
	五 島	大 阪	五 島	大 阪	五 島	大 阪	五 島	大 阪
1	⑧きれいい好	④親 切	⑧きれいい好	⑧きれいい好	④親 切	④親 切	⑧きれいい好	④親 切
2	④親 切	⑧きれいい好	④親 切	⑪活 気	⑧きれいい好	⑧きれいい好	④親 切	⑧きれいい好
3	②注意深い	⑪活 気	⑪活 気	④親 切	②注意深い	②注意深い	②注意深い	⑪活 気
4	⑪活 気	①器 用	⑮美的セン	⑮美的セン	⑪活 気	⑤細かい点	⑤細かい点	①器 用
5	①器 用	⑫独 創 的	②注意深い	⑫独 創 的	①器 用	⑪活 気	⑪活 気	②注意深い
16	⑩口下手	⑩口下手	⑩口下手				⑩口下手	⑦時々間違える
17	⑨あてな	⑨あてやすい	⑭文章がでない	⑩口下手	⑮美に無関心		⑮気分不安定	⑥計算下手
18	⑮気分不安定	⑮行 動 的	⑮行 動 的	⑮行 動 的	⑮気分不安定		⑬引込思案	⑩口下手
19	⑮行 動 的	⑮気分不安定	⑮気分不安定	⑮気分不安定	⑮文章がでない		⑮行 動 的	⑮文章がでない
20	⑮文章がでない	⑮文章がでない	⑮あてやすい	⑮あてやすい	⑮行 動 的	⑮行 動 的	⑮文章がでない	⑮行 動 的

表5 各項目の上五島と大阪の有意差関係

		高 校 生		父 兄	
		男	女	男	女
1	手先が器用である	*			
2	注意深い	●	●●		
3	体力がある			**	
4	親切である	***	**		*
5	細かい点まで気がつく	***		*	
6	計算がうまい			**	
7	正確である			**	
8	きれいい好きである				
9	機敏である			*	
10	説得力がある		*	***	
11	活気がある		***		
12	独創的である	**	*	*	
13	社交的である	***	***	***	*
14	文章がすぐできる	***	**	***	**
15	美的センスに富む		*	**	*
16	いつでも気分が安定している				
17	理論を好む	*			
18	粘り強い			**	
19	沈着である				
20	思慮深い				

大阪の方がより高く評価されたものの有意差
10% * 5% ** 1% ***

五島の方がより高く評価されたものの有意差
10% ● 5% ●● 1% ●●●

受けた印象ではむしろ上五島の方が親切であった。それは調査にはるばるやってきた stranger に対してだけであったのか、あるいは両地域において親切という基準が異なっているためか明確ではない。また、上五島の方が高く評価されている唯一の項目として、②注意深いがあげられる。漁業・農業を問わず島民のほとんどが足として船を利用する上五島では、強大な自然に対して大阪高校生よりはるかに注意深さを要求されるのであろう。しかし、逆に、⑤細かい点まで気がつくの項目では大阪男性に有意にみられる。したがって、この両項目の関係から、上五島においては対自然、大阪においては対人間に対する細心さを示していると考えられ、ここに地方と都会の差がうかがえる。

⑫独創性については大阪高校生に有意に認められる。それは数多くのマスコミを中心とした独創の氾濫した都会の影響を大きく受け

ているのではないかと考えられる。また、⑰理論的志向性についての差異が認められるのも、高校生の政治活動が大都市周辺にみられることから理解できるとともに、上五島高校の先生が高校生をさして政治的関心が薄く、理論的な話の進め方が下手であるとの観察とも合致する。

女性については、大阪高校生の方が⑪活気があり、⑩説得力があり、しかも⑬社交的である。これは大都会では比較的「女性だから……」といった社会的制約が少ないためと考えられる。また、⑮美的センスに富み、⑫独創性が豊かである点、大阪女子高生の方が女性的な感覚の長所をよりみきわめているといえる。

続いて、父兄の結果をみると、有意な地域差を示した項目は、男性に比して女性に少ない。これは男性の方が女性以上に所属する社会および職業によって性格の変化を余儀なくされており、他方女性は男性に比して周囲に対する順応性が高く、さらに、地域の影響よりもいまだ日本女性としての有り方のほうがやや強い影響力をとどめているからだと考えられる。なぜなら、地域差を示した項目数をみると、高校男性は20項目中8項目であるのに対し、父兄男性は11項目に増加し、逆に、高校女性では8項目あったのが、父兄女性では4項目に減じているからである。

本調査において、8グループ間で最も顕著なプロフィールを示し、総平均値が他の7グループと有意に異なっていたのは大阪父兄男性であった。特に、上五島父兄男性との比較では、⑰理論を好む、以外はすべて高い評価がなされ、有意差を示したのは11項目にのぼった。すなわち、大阪父兄男性は体力があり、粘り強く、機敏であり、計算がうまく、正確であり、文章がすぐでき、細かい点まで気がつき、説得力があり、独創的、社交的で美的センスに富む。これらのうち、③体力、⑨機敏については一般的に考えた場合、はるかに上五島父兄の方が体力があり機敏であると思われるが、親切などの概念や評価と同じように、その価値基準の相異が認められる。さらに、⑤細かい点まで気がつく、⑭文章がすぐできる、⑮独創的などの項目に有意差がみられるのは、大阪父兄の職務上の関係、対人関係などから要請されるものであり、換言すれば、上五島の物事にこだわらないおおらかさがうかがえる。また、⑥計算がうまい、⑦正確である、⑩説得力がある、⑱粘り強いなどは大阪の商人的イメージを反映しているといえる。本調査の父兄男性サンプルには中小の商工業経営主が多かったことから、その職業的性格とともに大阪という土地柄の性格を示している。

父兄女性については、ほとんど高校女性に準じているが、地域差を示した項目は前述のように少ない。⑭文章ができ、⑮美的センスに富むといった女性的な能力についての評価と、④親切で、⑬社交的といった都会的性格がわずかながら大阪にみられたにすぎない。

以上、自己概念像について、上五島民と大阪人の地域差を分析してきたが、大阪人と上五島民のそれぞれの自己像評価を全体としてみると、大阪人の自己評価は高く、上五島民は低くなっている。ここに両地域における項目の評価基準の相異はもちろん、両地域社会の持つ特質が反映されている。因襲や慣習など社会が目に見える力で住民を規定している地域(上五島)においては、おのずと人はその社会において自己の評価を小さくし、社会に従属していくであろうし、逆に、ほとんど伝統や慣習の力が働かない地域(大阪)においては、人は自己の評価を何にも妨げられることなく高めることができる。そのため都会においてはより高い自己評価がなされるのである。その際、都会では自己の評価基準は周囲によって決定されるのではなく、自

らの手でさぐり出さなければならない。そういった時、ほとんどの人間は自己の内部への追求のかわりに、その社会からなんとかかえようと自ら進んで社会化を望む。そのため都会においては人間の社会化が無制限に行なわれている。それは人づきあいのうまさといった都会的性格に反映している。たとえば、大阪人に有意にみられた社交的、親切、説得力があるといった項目は他人と生活していく上に必要欠くべからざる条件であろうし、独創的、文才、美的センスといったものは多くの人々の中で自己がいかに個として独立しているか、自己の能力を他人に認めさせるかに方向付けされている。Fromm, E. (7) のいうように都会人にとって性格特性は商品的な価値を持ち始めたともいえる。すなわち、社会の求める好ましい性格を自らのうちに形成することは自己の商品的価値を高めることになる。

IV. 結 論

以上の考察から、都市在住者と地方在住者（上五島）とに特有な性格（自己像）を見い出すことができた。すなわち、大阪の人間は一般的に自己の評価が高く、人格の社会化の過程で社会に迎合的であり、自己の特性についての認識が高く、個性性への意識が高い。反対に、上五島民の自己評価は低く、自然及び職業に従順でそれらの影響が大きい。

また、大阪父兄男性が他の群より大きくかけ離れていたこと（社会的、職業的要件による）、高校生において地域差がやや少なかったこと（文化の発達、マスコミによる画一化と考えられる）、女性の方に地域差が少ないことが明らかになった。
(1971. 9. 27)

参 考 文 献

- 1) 日本心理学会発表論文集 第28回～35回 1964～1971
- 2) Arkoff, et. al, Dominance-Deference Patterning in Motherland-Japanese, Japanese-American and Caucasian American Students, J. soc. Psycho. 58, 1962 61—66
- 3) Murray, H. A. パーソナリティー I 外林大作訳 1967 誠信書房
- 4) 伊吹山太郎 近畿圏内の新規学卒労働者の職業についての希望 近畿圏 1969 鹿島出版会 251—268
- 5) 河村雷雨 社会学序説 1968 双葉書店
- 6) 宮城音弥 日本人の性格 1969 朝日新聞社
- 7) Fromm, E. 人間における自由 谷口、早坂訳 1955 創元新社